



Title	蒔絵の琳派意匠についての考察 : 売立目録を中心に
Author(s)	矢野, 節子
Citation	デザイン理論. 2018, 72, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70575
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

蒔絵の琳派意匠についての考察 ― 売立目録を中心に ―

矢野節子 神戸大学大学院

はじめに

琳派とは桃山時代後期に俵屋宗達（生没年不詳）を創始者とする様式で、絵画の他に工芸意匠によくみられる。とりわけ蒔絵の作品が多く、江戸時代半ば頃より光悦蒔絵、光琳蒔絵とよばれる作品群が出現する。本阿弥光悦（1558-1637）の自作及び彼の影響下において制作された蒔絵作品を光悦蒔絵とよぶ。光悦の影響を受けた尾形光琳（1658-1716）の自作及び彼の絵画様式を意匠とする蒔絵作品が光琳蒔絵とされる。両者とも文学を主題とし、草木花や鶴、鹿、故事人物、道釈人物を図案化した大胆な構成が特徴である。技法は黒の呂色塗り、もしくは金沃懸地に厚貝や錫、鉛を用いた平蒔絵である。琳派意匠を用いた光琳写しと光琳好みとが混在しているため多数の作品が存在する。それらの類作は光琳在世中より制作されたとみられ、さらに光琳の没後、その様式は江戸時代を通じて広がり、明治時代には西欧におけるジャポニスムの流行によって制作、欧米に輸出されるに至った。本研究では類作を概観することでどのような図様が受容されたのかを考察する。

売立目録の調査方法

作品の調査にあたり、美術館の所蔵作品だけでは限りがあるため売立目録の掲載作品を収集した。売立目録とは特定個人や名家の所蔵品などを、入札前に配布する冊子目録のことである。目録には主に書画骨董などの美術作品の図版、品目名、形態等の記載がある。美術品の入札は江戸時代の享保頃より行われていたが、明治維新で国情が混乱すると入札

は閉鎖し、美術品の海外流出をも招くことになった。しかし、世相が安定するにしたがって再び美術品への関心が高まり、明治10年前後には同業者による組合が創設され、入札会が開催されるようになった。発行された目録の総数は数千冊であるといわれるが、その実態は明らかになっていない。閲覧の内訳は阪急財団池田文庫にて1882冊、相山女学園大学中央図書館にて131冊、東京文化財研究所にて60冊、東京都立中央図書館にて7冊、名古屋市鶴舞図書館にて4冊の総数2084冊である。原羊遊斎（1769-1845）や永田友治（生没年不詳）など、制作者が判明しているものは除外した。光悦作、光琳作、作者不詳の作品は217冊に認められ、そのうち重複作品と光琳の基準作を除いた228点について検証を行った。作品の選定は、技法が琳派様式によるものを抽出したのち、用いられている図様が琳派の特徴に合致しているものとした。それらの図案を分類、検証する過程で明らかになった事項について報告を行う。なお光琳の基準作とされるのは、現在、《八橋螺鈿蒔絵硯箱》東京国立博物館蔵、《住之江蒔絵硯箱》静嘉堂文庫美術館蔵、《桜狩蒔絵硯箱》藤田美術館蔵、《紅葵花蒔絵硯箱》畠山記念館蔵、《松山茶花蒔絵硯箱》個人蔵の5点であるが、本研究では石川県立美術館蔵の《蒔絵螺鈿野々宮図硯箱》、《蒔絵螺鈿白楽天図硯箱》、《蒔絵梅椿若松図重箱》、《蒔絵螺鈿萩図雪吹》、《蒔絵鹿に萩図硯箱》の5点を加えて考察を行った。

類作の発生理由

収集した作品図版を、器物の目的用途別に分類した結果、硯箱が最も多いことが判明したが、室礼としての硯箱が必要であったためであろう。次に装身具の印籠が多く、江戸時代末期より欧米人に珍重され、その需要に応えるために明治以降に根付けとともに制作が盛んであったことが窺われる。茶道具では薄茶器と香合は光琳好みと光琳写しが多くみられる。茶道においては既にある文様や形態を模造することは写しとよぶ独特の文化があり、制作当初は光琳写しであったものが後年に光琳作とよばれるようになった可能性は高い。これらの類作が意図せずして贋作となったこともあろうかと思われる。文様の分類では、鹿、鶴、八橋と燕子花、舟橋の順に多くあり、文学意匠が好まれていることが確認できる。次いで御所車と片輪車が多く、これらは琳派の意匠ではない。王朝文化を身近なものに取り入れる風潮があったことから、光悦蒔絵、光琳蒔絵の技法で制作したと推測される。また、白楽天と佐野渡図も多い。白楽天は謡曲に取材した画題で、光琳は《白楽天図屏風》も描いている。佐野渡図は藤原定家の和歌を絵画化したもので光琳以降の琳派の画家にも好まれた画題である。これらの図様の源泉となったものは、名品そのものの写しのほか、図案集が考えられる。酒井抱一（1761-1828）は、文化12年（1815）の光琳百年忌に際して『光琳百図』を刊行した。その2年後に『光琳漫画』が刊行された。これは享保20年（1735）刊『光琳絵本道知辺』の復刻版ともいえる。さらに文政9年（1826）に『光琳百図』後編が刊行した。抱一の弟子の池田孤邨（1803-1866）は元治元年（1864）『光琳新撰百図』を刊行した。これらの図案を用いることで類作の制作は可能である。一見したところ琳派の意匠の特徴と同じ図様であるが、

『春正百図』を元にしたものも認められた。これは、江戸時代の京都の蒔絵師の山本春正（1610-1682）の制作とされるもので、その作品は春正塗の名で人気を博した。春正塗の技法は高蒔絵を用いた複雑なものであるため、類作では図案を『春正百図』より使用して技法は平易な琳派の様式としたのではないかと思われる。光悦作には銘がないが、光琳には銘が入っている作品が多くある。光琳蒔絵には金平蒔銘や朱銘で「法橋光琳造」、「青々光琳造」がみられ、印籠には針書が入る。しかしそれらが光琳作であるという保証にはならない。なぜならば、蒔絵の制作は分業制であり工房で行われるからである。光琳作の《住之江蒔絵硯箱》は光悦蒔絵の舟橋蒔絵硯箱と同様に蓋を高く盛り上げた特有の形を使用している。この形態の箱を制作した工房で類作を制作、または図案が流出した可能性も考えられるが、さらに検討が必要である。

おわりに

光悦蒔絵、光琳蒔絵の類作には、人気のある図案が平易な技法である琳派様式で制作されたものが混じっていることが判明した。一時期、光悦蒔絵の和歌の文字を用いたものが複数出現するなど、年代によって流行があることも確認することができた。また、代表的な主題について、元になった図案集の下絵と類作を比較する過程で、昭和に入ってから売立目録掲載作品には形骸化した図様が認められた。このことから制作年代を特定することは難しいが、雛形本や名品から図案を安易に拝借したため、稚拙な模倣となり劣化した図様を招く結果となったことは確認できた。